



Title	阪神中哲談話会 四十年余の記録
Author(s)	阪神中哲談話会幹事
Citation	中国研究集刊. 2004, 35, p. 25-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60946
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

阪神中哲談話会 四十年余の記録

阪神中哲談話会幹事

阪神中哲談話会は、『日本中国学会報』の第十六集所載の活動報告の後書きによれば、昭和三十八年（一九六三）に阪神関係の中国哲学研究者三十五名の総力を結集して創立された。現在まで四十一年、開催された例会は三六〇回を超え、現会員は約百三十名を数える。本記録は、当会の会員の一人でもある、大阪大学の湯浅邦弘教授からの、この長い歴史を持つ阪神中哲談話会の活動の様子を報告してどうかというご提案により、菅本・矢羽野の現幹事がまとめたものである。

本会関係者によれば、阪神中哲談話会には発足以来の活動内容を、具体的にはそれぞれの例会の発表内容や質疑の模様を、筆記した資料が存在するはずであるが、現在その資料のほとんどが所在未詳で、ただ第三二九回（平成十年（一九九八）以降を記録したノート一冊が、現幹事に伝えられているのみである。このような事情から、

今回この活動記録をまとめるに当たっては、ほとんどを『日本中国学会報』の「国内学会消息」所掲の記録に拠らざるを得なかった（ただし漢字表記は基本的に通行の字体に改めた）。開催日・発表場所などに繁簡の差があるのは、基とした「国内学会消息」の体例が異なるためである。

当初は、最近十年間の報告のみにするはずだったが、これまでの歴代幹事の方々が毎年の活動を『日本中国学会報』に報告して下さっていたため、全活動記録をまとめることが可能となった。以下は、阪神中哲談話会で行われた全ての例会の開催日（場所）・発表題目・発表者を列挙したものであり、単純なデータの羅列ではあるが、これまでの当会の長い歴史を振り返るには、もつとも不可欠な記録であると考えている。

【昭和三十三年（一九六三）】

第一回（六月三十日 阪大文学部会議室）

米欧での中国哲学研究状況 木村英一

第二回（九月十五日 阪大文学部会議室）

香港旅行談 山口一郎

鎌田正著『左伝の成立とその展開』について

野村茂夫

第三回（十月二十七日 阪大文学部会議室）

孝思想研究その一 加地伸行

鈴木由次郎著『漢易研究』について 本田濟

第四回（十二月一日 阪大文学部会議室）

『矛盾論』をめぐる諸問題 小林立

『荀子』の情性論 田中利明

【昭和三十九年（一九六四）】

第五回（一月十九日 阪大文学部会議室）

『太史公自序』試論 三浦國雄

譚嗣同とその思想 橋本高勝

第六回（二月十六日 阪大文学部会議室）

魏源の現実批判と歴史観 坂出祥伸

仁斎学の展開（京都市共同体における倫理と論理）

三宅正彦

第七回（三月十五日 阪大文学部会議室）

南朝儒仏道の変遷（弘明集の世界が示すもの）

木全徳雄

アーサー・ウェーレー著『孟子』について

安本博

第八回（四月二十六日 阪大文学部）

帰有光の士大夫批判 庄司荘一

唯物論と觀念論と生命の哲学 木村英一

第九回（五月二十四日 阪大文学部）

書評 小松原濤著「陳元賛の研究」 水原渭江

伯夷列伝における司馬遷の思想 佐藤震二

第一〇回（七月五日 阪大文学部）

書評 加賀栄治著「中国古典解釈史」 木全徳雄

自然の意味 森三樹三郎

第一一回（九月十三日 阪大文学部）

論語研究試論 鈴木喜一

劉子について 清水潔

第一二回（十月十五日 阪大文学部）

書評 宮川尚志著「六朝史研究（宗教篇）」

村上嘉實

第一三回（十一月十五日） 阪大文学部

書評 重沢俊郎著「中国哲学史研究」 加地伸行

第一四回（十二月十三日） 阪大文学部

家族制度と刑罰 西田太一郎

【昭和四十年（一九六五）】

第一五回（一月二十四日） 阪大文学部

紹介 顧樹森著「学記今釈」 竹鼻広三

第一六回（二月二十一日） 阪大文学部

錢謙益とその時代 湯浅幸孫

第一七回（三月二十八日） 阪大文学部

章炳麟について 橋本高勝

第一八回（四月二十五日）

最近の「紅旗」の論調 久場真樹

第一九回（五月二十三日）

孟子の思想 安本博

第二〇回（六月二十日）

幕藩体制社会における自由意思の形成とその特質

三宅正彦

第二一回（七月十八日）

「淮南子における氣の研究」（平岡禎吉著）をめぐる

諸問題 田上泰昭

第二二回（九月二十六日）

考証学の本質 本田濟

第二三回（十一月七日）

書評 神田喜一郎著『日本における中国文学一』

水原漕江

墨子私感 森三樹三郎

第二四回（十二月十一日）

マックス・ウェーバー「儒教と道教」雑感

木全徳雄

【昭和四十一年（一九六六）】

第二五回（一月三十日）

仲長統の思想 神楽岡昌俊

第二六回（二月二十七日）

朱子の社会思想 庄司荘一

第二七回（四月三日）

復性書の成立 大西晴隆

第二八回（五月八日）

孔子—その礼説を中心として— 松代尚江

第二九回（六月五日）

阮籍小論 岩佐昌暉

第三〇回（七月十日）

木全徳雄氏論文「儒教の本質」（漢文教室七六号）に
ついて 野村茂夫

第三一回（九月二十五日）

清末の思想をめぐる 坂出祥伸

第三二回（十一月十三日）

儀礼喪服の経と記―武威漢簡をめぐる―

田中利明

第三三回（十二月四日）

中国学研究を回顧して 木村英一

【昭和四十二年（一九六七）】

第三四回（一月二十二日）

書評―金谷治氏『孟子』（岩波新書） 安本博

最近の東南アジアの学会消息 水原渭江

第三五回（二月二十六日）

蘭亭序偽作論―中国の書法論― 大久保莊太郎

第三六回（四月十六日）

論語における「仁」の意味 長谷川雅樹

第三七回（五月二十一日）

顧広圻の文献学 西野貞治

第三八回（六月十一日）

南斉の蕭子良について 若槻俊秀

第三九回（七月九日）

島田虔次著『朱子学と陽明学』（岩波版）合評

庄司莊一・三宅正彦

第四〇回（九月二十四日）

李長之の司馬遷論 三浦國雄

第四一回（十月二十二日）

論語成立の分析方法 金戸守

第四二回（十二月三日）

山片蟠桃をめぐる 宮内徳雄

【昭和四十三年（一九六八）】

第四三回（一月二十八日）

朱注論語「学」字的批判 黄錦鏞

第四四回（二月二十五日）

文化革命の一側面 久場真樹

第四五回（五月十二日）

後漢の党錮 神楽岡昌俊

第四六回（六月二日）

思想の大衆化について―文化大革命の一つの見方―

岩佐昌暲

第四七回（七月七日）

抱朴子―仙人への道 本田濟

第四八回（九月二十九日）

災異と讖緯 日原利國

第四九回（十一月十七日）

公孫龍は詭弁論者か 加地伸行

第五〇回（十二月十五日）

中国学研究回顧 清水潔

【昭和四十四年（一九六九）】

第五一回（一月二十六日）

道家学派の成立 岩佐昌暲

第五二回（二月十六日）

朱子学私新抄 木南卓一

第五三回（四月二十七日）

沈括の自然観察について 坂出祥伸

第五四回（五月十八日）

論語私読 白石仁祉

第五五回（六月十五日）

先秦の天について 野村茂夫

第五六回（七月十三日）

告子について 大西晴隆

第五七回（九月二十八日）

ジェームス・劉氏の「王安石の改革」について

庄司荘一

第五八回（十月十九日）

林彪の「人民戦争勝利万歳」について 久場真樹

第五九回（十一月二十三日）

資治通鑑の世界への序章 三浦國雄

第六〇回（十二月十四日）

中国学研究回顧 森三樹三郎

【昭和四十五年（一九七〇）】

第六一回（二月八日）

仁齋学の個人的性格と家学的性格 三宅正彦

第六二回（四月十九日）

孔子の仁について 鈴木喜一

第六三回（五月十七日）

資治通鑑について 三浦國雄

第六四回（六月二十八日）

李大釗の「時間」概念について 河田悌一

第六五回（七月二十六日）

論語の話し 木村英一

第六六回（九月二十七日）

「反訓」について 林博之

第六七回（十月二十五日）

《呂氏春秋という書物が持つ三つの性格について》

— 呂氏春秋研究・その一 — 伊藤計

第六八回（十二月六日）

日本儒教雑感 西田太一郎

【昭和四十六年（一九七二）】

第六九回（一月三十一日）

嵇康について 平木康平

第七〇回（三月三十一日）

元稹（連昌宮詞）之研究 前川幸雄

第七一回（四月二十四日）

最近の台湾について 秋田成明

第七二回（五月二十九日）

王安石の「周官新義」研究（続） 庄司莊一

第七三回（六月二十七日）

論語成立の疑問点 金戸守

第七四回（七月二十四日）

袁枚の哲学 本田濟

第七五回（九月二十五日）

森三樹三郎著「上古より漢代に至る性命觀の展開」
を読んで 田中利明

第七六回（十一月六日）

ウェーバーの宗教社会学の諸問題について

木全徳雄

第七七回（十二月五日）

鄭の子産と晋の叔向 安本博

【昭和四十七年（一九七二）】

第七八回（一月二十九日）

譚嗣同の「仁学」思想について 田辺秀夫

第七九回（三月二十五日）

中国思想と西欧思想の接点に於ける林語堂

尾崎和子

第八〇回（四月二十二日）

中国思想研究についての提案 木村英一

第八一回（五月二十日）

中国哲学研究者の任務と課題―文革後の中国の儒教

批判をめぐって― 岩佐昌暉

第八二回（六月二十四日）

京都支那学の送喪 加地伸行

第八三回（七月二十二日）

古典中国の家族道徳 野村茂夫

第八四回（九月二十三日）

読左伝 田上泰昭

第八五回（十二月三日）

六朝文化の性格 村上嘉實

【昭和四十八年（一九七三）】

第八六回（一月二十七日）

ひとつの夷狄論 日原利国

第八七回（二月二十四日）

康有為から章炳麟へ―近代への転生― 小林武

第八八回（四月二十八日）

意味血脈説と人情説―仁斎学の原点― 三宅正彦

第八九回（五月二十七日）

夏小正の欠落についての一考察 久保田剛

第九〇回（六月二十三日）

陽明の思想に関する一・二の考察 大西晴隆

第九一回（七月二十一日）

杜甫の詩をめぐって 黒川洋一

第九二回（九月二十二日）

孟仲季月令と十二月令について 伊藤計

第九三回（十一月十日）

西周から東周―尚書「文侯之命」の背景 北村良和

第九四回（十二月九日）

パリに於けるフランス東洋学者会議に出席して

本田濟・坂出祥伸

台湾省に於ける學術事情について 加地伸行

【昭和四十九年（一九七四）】

第九五回（一月二十七日）

海外奇談と唐話学 水滸伝―八犬伝―海外奇談

小林祥浩

第九六回（三月二十一日）

漢代の自然觀の一面―董仲舒の説を中心として―

田中麻紗巳

第九七回（四月二十一日）

古代中国の自然法思想 山口久和

第九八回（六月八日）

窮理持敬 花崎隆一郎

第九九回（七月二十一日）

保守的革命家―章炳麟 河田悌一

第一〇〇回（八月二十八日～二十九日）

百回記念大会（山陰城崎にて）

第一〇一回（九月二十一日）

論皮日休 本田濟

第一〇二回（十一月九日）

紹介…西田太一郎博士著『中国刑法史研究』（岩波書店）

日原利国

第一〇三回（十二月八日）

盜賊・游侠などについて 竹内照夫

【昭和五十年（一九七五）】

第一〇四回（一月二十五日）

変態白話にみる江戸文人の用字意識 小林祥浩

第一〇五回（二月十五日）

『莊子』齊物論篇における知識と言葉 池田知久

第一〇六回（四月二十六日）

文章の意義について 久場真樹

第一〇七回（五月三十一日）

賈逵の主張について―後漢春秋家の一側面―

田中麻紗巳

第一〇八回（六月二十一日）

王陽明の孝観 小林和彦

第一〇九回例会（七月十九日）

『孟子字字義疏証』の認識論 橋本高勝

第一一〇回（九月二〇日）

「自然」と「因縁」 若槻俊秀

書評…大濱皓『中国・歴史・運命―史記と史通―』

（勁草書房） 加地伸行

第一一一回（十一月八日）

杜詩「幽」字考―杜甫の自然観 黒川洋一

第一一二回（十二月七日）

安藤昌益の儒学的環境 三宅正彦

訪中スライド 橋本高勝

【昭和五十一年（一九七六）】

第一一三回（一月二十四日）

清末の保守主義 小林武

第一一四回（二月二十九日）

米芾の人と芸術 杉村邦彦

第一一五回(四月二十四日)

魏源の書古微―今文経学の一側面― 北村良和

第一一六回(五月三十日)

秦の墨家集団 堤保仁

第一一七回(六月二十六日)

段玉裁の研究 木下鐵矢

第一一八回(九月二十五日)

日原著『春秋公羊伝の研究』―紹介と批評

後藤延子

第一一九回(十月三十日)

『国語』における西周記事の性格―周語上・九章と

鄭語 田上泰昭

第一二〇回(十二月二十一日)

メキシコ国際東洋学者会議報告

河田悌一・平木康平

インド仏蹟報告 若槻俊秀

【昭和五十二年(一九七七)】

第一二一回(一月二十九日)

王船山の哲学 山口久和

第一二二回(三月二十六日)

董仲舒から「春秋繁露」へ 伊藤計

第一二三回(四月二十三日)

賈誼鵬鳥賦について―荘子との関連を中心として―

田中麻紗巳

第一二四回(五月十四日)

坂出訳『大同書』(明德出版社) 書評 康有為のユート

ピアの性格 橋本高勝

第一二五回(六月二十五日)

弘法大師と『莊子』―『遍照發揮性靈集』にみられ

る『莊子』の影響― 静慈圓

第一二六回(七月三十一日)

曾國藩―日記を中心として― 本田濟

第一二七回(九月二十四日)

易伝における剛柔と陰陽 今井宇三郎

第一二八回(十一月十九日)

韓愈の「論語筆解」について 田中利明

第一二九回(十二月四日)

チベット報告 庄司荘一

【昭和五十三年(一九七八)】

第一三〇回（一月二十八日）

詩経の方社の祭りについて

藤田忠

第一三一回（二月十八日）

中国紀行 黄濟清

第一三二回（四月二十二日）

清代學術の側面―朱筠、邵晋涵、洪亮吉、そして

章学誠― 河田悌一

第一三三回（五月二十日）

寇謙之 道教考 尾崎正治

第一三四回（六月十七日）

四人組時代の中国で生活して

岩佐昌暉

第一三五回（七月二十二日）

「十大關係を論ず」について

久場真樹

第一三六回（九月三十日）

「孟子」についての一考察―《大人》と《小人》―

伊藤計

第一三七回（十一月十八日）

魯季敬姜考 田上泰昭

第一三八回（十二月三日）

宣和書譜について 日原利国

【昭和五十四年（一九七九）】

第一三九回（一月二十七日）

漢書に於ける時について

北村良和

第一四〇回（三月二十四日）

馬融について 池田秀三

第一四一回（四月二十八日）

淮南子の成立―史記と漢書の検討―

池田知久

第一四二回（五月二十六日）

隠と逸 神楽岡昌俊

第一四三回（六月三十日）

漢初における「老子」の意義について

西川靖二

第一四四回（八月二十五日）

論語の始原 金戸守

第一四五回（九月二十九日）

馬王堆漢墓出土導引図をめぐる

坂出祥伸

第一四六回（十一月四日）

読雕菰集 本田濟

第一四七回（十二月八日）

漱石の「木屑録」と子規の批評

庄司荘一

【昭和五十五年（一九八〇）】

第一四八回（一月二十六日）

春秋公羊伝何休注の意図―災異解釈からの考察―

田中麻紗巳

第一四九回（二月二十三日）

阮籍の楽論について 石川徹

第一五〇回（三月二十七日）

例会一五〇回記念行事のため研究発表なし

第一五一回（四月二十六日）

漢初の天人合一思想とその系譜 齋木哲郎

第一五二回（五月三十一日）

論語鼎句の考察 宮内徳雄

第一五三回（六月二十八日）

徂徠学における社会と人間 相見英咲

第一五四回（八月三十日）

「史通」疑古篇に就いて 福島正

第一五五回（九月二十七日）

清朝人と道教 本田濟

第一五六回（十一月十五日）

春秋左氏伝の結末と越記事―夷蛮の覇者への対応―

田上泰昭

第一五七回（十二月七日）

張載の思想について―「天」と「聖」― 木下鐵矢

【昭和五十六年（一九八二）】

第一五八回（一月三十一日）

殷西周の小子について―甲骨金文を中心にして―

木村秀海

第一五九回（三月二十八日）

齋魯と山東省 西田太一郎

第一六〇回（五月二日）

梁漱溟の仏教的人生観―「究元決義論」を中心に―

後藤延子

第一六一回（六月二十七日）

王弼について 野間和則

第一六二回（九月二十六日）

徂徠の政治論と徂徠学派の展開―「聖人の道」論から「老子の道」論へ― 相見英咲

第一六三回（十一月七日）

漢初の社会動向と春秋公羊学 齋木哲郎

第一六四回（十二月五日）

アメリカの中国研究―スライドにて― 河田悌一

【昭和五十七年（一九八二）】

第一六五回（二月六日）

偽古文尚書作者考 野村茂夫

第一六六回（四月二十四日）

周易正義にみえる道教的思想について 池田秀三

第一六七回（六月五日）

鶡冠子の思想 大形徹

第一六八回（七月三日）

道士―在家から出家へ― 尾崎正治

第一六九回（七月三十一日）

錢謙益の哲学 本田濟

第一七〇回（九月十八日）

「当断不断・反受其乱」―馬王堆漢墓帛書の語などをめぐって― 田中麻紗巳

第一七一回（十一月六日）

邵晋涵の歴史学 福嶋正

第一七二回（十二月四日）

江南の旅 田中利明・中村圭爾

【昭和五十八年（一九八三）】

第一七三回（一月二十九日）

古卦変説の整理について 花崎隆一郎

第一七四回（二月二十六日）

形声文字の成立について 大川俊隆

第一七五回（四月二十三日）

秦の法と社会―雲夢秦簡研究序説― 湯浅邦弘

第一七六回（五月二十八日）

「洞真部」概説 野間和則

第一七七回（六月二十五日）

彭祖伝説と《彭祖経》―中国古代の養生思想― 坂出祥伸

第一七八回（七月三十日）

『淮南子』と従横家思想 向井哲夫

第一七九回（十月八日）

朱子と古代文化 山下知樹

第一八〇回（十一月十九日）

荀勗の音律説の意義について 児玉憲明

第一八一回（十二月三日）

『管子』軽重篇について 金谷治

【昭和五十九年（一九八四）】

第一八二回（一月二十一日）

邵晋涵と『統資治通鑑』 福島正

第一八三回・一八四回（二月二十五日）

曾子の実像と虚像―戦国末期における孝思想の拡大

発展の過程において― 衣笠勝美

自著『山片蟠桃「夢の代」と生涯』プロローグ

宮内徳雄

第一八五回（四月二十八日）

行動の任侠的原理と“社会”意識について―

小林武

第一八六回（五月二十六日）

葉水心の立場 庄司莊一

第一八七回（七月十四日）

会意字と「偏旁添加字」の区別 大川俊隆

第一八八回（八月四日）

五代の詩人たち 本田濟

第一八九回（九月二十九日）

『老子想爾注』について 麥谷邦夫

第一九〇回（十月二十七日）

魏禧の学問について 山下知樹

第一九一回（十二月八日）

気功と道教 三浦國雄

【昭和六十年（一九八五）】

第一九二回（一月十九日）

王陽明の「五歳不能言」についての管見―その伝記

への一視点― 小林和彦

第一九三回（二月二十三日）

マルセル・グラネのソーロラト婚論について―昭

穆制とは何か― 北村良和

第一九四回（三月二十三日）

墨家思想の宗敎性について 奈良行博

第一九五回（四月二十七日）

星の流れ―左伝の占星術― 塩出雅

第一九六回（五月二十五日）

『太平経』の再出について 前田繁樹

第一九七回（六月二十二日）

帛書「五行篇」の思想的地位―儒家による天への

接近― 浅野裕一

第一九八回（七月二十日）

騶衍五行説考 林克

第一九九回・二〇〇回（八月二十六・二十七日）

―例会二百回記念旅行（鳥取県三朝）―

例会二百回を顧みて 野村茂夫

第二〇一回（九月二十八日）

明代復古派詩說の思想的意義 山口久和

第二〇二回（十月二十六日）

『莊子』天下篇の田駢、慎到關係文の意味について
向井哲夫

第二〇三回（十二月七日）

第四回日仏學術シンポジウム東洋学部会（パリ）に
出席して（附）中国近現代哲學討論会（広州）の報告
坂出祥伸

【昭和六十一年（一九八六）】

第二〇四回（一月二十五日）

意識と工夫―程伊川の工夫論について― 中純夫

第二〇五回（三月二十二日）

殷代の戦争犠牲者について 末次信行

第二〇六回（四月二十六日）

茅山参拝記 奈良行博

山片蟠桃と福沢諭吉 宮内徳雄

第二〇七回（五月三十一日）

伊藤仁斎の初期思想―御霊信仰・在家往生思想・臨
濟禪を基礎にして― 三宅正彦

第二〇八回（六月二十一日）

西周時代の代訴・越訴記録 木村秀海

第二〇九回（七月五日）

福建省の朱子遺蹟について 宇野茂彦

第二一〇回（八月三十日）

「性命古訓」について 橋本高勝

第二一一回（九月二十日）

太宰春台と仏教 若槻俊秀

第二一二回（十一月一日）

盧植について―後漢礼学史への覚書― 池田秀三

第二一三回（十二月七日）

台湾宗教事情 平木康平

【昭和六十二年（一九八七）】

第二一四回（二月二十八日）

後起偏旁「口」添加諸字の検討 大川俊隆

第二一五回（四月二十五日）

孟子の義について―研究史的観点から―

吉永慎二郎

第二一六回（五月三十日）

近世初期の日本儒学について 井上順理

第二一七回（六月二十七日）

漢六朝墓の明器—とくに江南出土六朝墓を中心に—

中村圭爾

第二一八回（七月二十五日）

呂氏春秋の養生思想について 島一

第二一九回（八月二十九日）

『列子』の思想的特色について 浅野裕一

第二二〇回（九月二十六日）

『列仙伝』の薬物と『神農本草経』 大形徹

第二二一回（十一月二十一日）

朱子『易本義』の卦変説について 花崎隆一郎

第二二二回（十二月十二日）

梅鶯と閻若璩 野村茂夫

【昭和六三年（一九八八）】

第二二三回（一月）

何休『春秋公羊解詁』の「太平」について

田中麻紗巳

第二二四回（二月）

王棲霞とその時代—五代道教の基礎的研究—

坂内栄夫

第二二五回（四月）

道蔵目録詳注私考 尾崎正治

第二二六回（五月）

大槻磐溪の経学 庄司荘一

第二二七回（六月）

孟子の仁—その理念的 성격— 吉永慎二郎

第二二八回（七月）

朱子の認識論—窮理と豁然貫通— 吾妻重二

第二二九回（八月）

大田錦城の考証学 金谷治

第二三〇回（十月）

春秋左伝の衛記事 田上泰昭

第二三一回（十一月）

嚴遵の道德指帰論について 武田秀夫

第二三二回（十二月）

清代漢学の成立について 橋本高勝

【昭和六四年・平成元年（一九八九）】

第二三三回（一月）

殷周連続の一側面 末次信行

第二三四回（三月）

六朝時代における至人の諸相 石橋成康

第二三五回 (四月)

江戸時代中期における中間的文化層の特性

—安藤昌益の場合— 三宅正彦

第二三六回 (五月)

『論語』里仁篇首章の読み換えと孟子の論理

吉永慎二郎

第二三七回 (六月)

中国の五岳と五廟 奈良行博

第二三八回 (八月)

大津皇子と金聖嘆・成三問

—日中朝の臨終詩の系譜— 浜政博司

第二三九回 (九月)

朱子学と陽明学の諸問題 柳田裕延

第二四〇回 (十一月)

詩の思想と詩作・鑑賞について 黄濟清

第二四一回 (十二月)

古代の夢 塩出雅

呂氏春秋の公と私について 西川靖二

第二四三回 (四月)

荀子における知の問題—天人合一思惟をめぐって—

吉永慎二郎

第二四四回 (五月)

『左伝』の「心」について 安本博

第二四五回 (六月)

『塩鉄論』にみえる『論語』の引用をめぐって

弐和順

第二四六回 (七月)

閻若璩の弁偽学 寛敦

第二四七回 (八月)

欧米における養生思想の研究 坂出祥伸

第二四八回 (九月)

墨子の論理学 原田高明

第二四九回 (十一月)

『史記』秦本紀考—司馬遷はなぜ「秦本紀」を立て

たのか— 福島正

第二五〇回記念例会 (十二月)

読真西山文集 本田濟

【平成二年 (一九九〇)】

第二四二回 (一月)

【平成三年（一九九一）】

第二五一回（一月十九日）

『因明論三三過』と『因明三三過本作法』

原田高明

第二五二回（二月二十三日）

新理学の形成—馮友蘭と新實在論 吾妻重二

第二五三回（四月二十七日）

莊子と神話 武田秀夫

第二五四回（六月一日）

徐階研究—王門の講学活動 中純夫

第二五五回（六月二十二日）

南朝の帝・王陵墓と墓前の石刻 中村圭爾

第二五六回（七月二十七日）

韓愈研究の諸問題 岸田知子

第二五七回（八月三十一日）

『殷代氣象卜辞の研究』と派生問題

—数を重んじる 思想について— 末次信行

第二五八回（九月二十八日）

董仲舒における物と心の問題をめぐって

宇佐美一博

第二五九回（十一月二十三日）

莊子の大而無用について 鈴木喜一

第二六〇回（十二月七日）

太古のことは滅びたり—楊朱の反歴史主義—

浅野裕一

【平成四年（一九九二）】

第二六一回（一月十八日） 茨木市福祉文化会館

莊子の思想の多様性 原田高明

第二六二回（三月二十八日） 茨木市市民会館

中国古代の葬制と仙説との関わりについて

大形徹

第二六三回（五月三十日） 茨木市福祉文化会館

雲南の道教遺跡—スライド付き— 奈良行博

第二六四回（六月二十日） 長岡京市中央公民館

日本思想史研究における朱子学理解の展開

三宅正彦

第二六五回（七月二十五日） 長岡京市中央公民館

朱子の修養論（『孟子』解釈をとりあげつつ解説する）

柳田裕延

第二六六回（八月二十九日） 茨木市市民会館

「歛」字再論 木村秀海

第二六七回（九月二十七日 茨木市市民会館）

毛伝・鄭箋のなかの動物観 小林清市

第二六八回（十一月十四日 茨木市市民会館）

続孔子・顔回と莊子―莊周の思想の源流に関する一

卑見― 衣笠勝美

第二六九回（十二月六日 京都堀川会館）

儒教と風水の国・韓国で考えたこと（スライド付き）

坂出祥伸

【平成五年（一九九三）】

第二七〇回（一月三十日 茨木市福祉文化会館）

『篆隸万象名義』考―空海の「辞書」を読む

岸田知子

第二七一回（四月二十四日 茨木市市民会館）

漢代の落首・童謡が語るもの 串田久治

第二七二回（五月二十九日 茨木市市民会館）

甲骨文「舌」字考 馬越靖史

第二七三回（六月二十六日 茨木市市民会館）

安藤昌益「私制字書卷」について―『字彙』批判に

みる昌益の漢字論― 古藤友子

第二七四回（七月二十四日 茨木市市民会館）

王安石の『老子』解釈 井澤耕一

第二七五回（八月二十八日 茨木市市民会館）

前漢における「春秋の義」について 田中麻紗巳

第二七六回（十月二十三日 茨木市市民会館）

詩注の学について 山口久和

第二七七回（十一月二十日 茨木市市民会館）

章炳麟における（我）の意識 小林武

第二七八回（十二月四日 ルビノ京都堀川）

「意存筆先」―無と有の立場― 村上嘉實

【平成六年（一九九四）】

第二七九回（一月二十二日 関西大学百周年記念会館）

「山月記」「李陵」―中島敦の漢文受容及『李陵』の題名

齋藤勝

第二八〇回（三月二十六日 茨木市福祉会館）

『戊戌後康有為梁啓超與維新派国際学術研討会』に

参加して 柴田幹夫

第二八一回（四月二十四日 茨木市市民会館）

『礼記』楽記篇における感情の問題と音楽教化論

橋本昭典

第二八二回（吹田市民会館）

李翱の経世観―「復性書」と「平賦書」との比較を
通して― 山口澄子

第二八三回（五月二十五日 茨木市市民会館）

賀麟の知行合一論 後藤延子

第二八四回（七月二十三日 茨木市市民会館）

敦煌の風水文書 宮崎順子

第二八五回（八月二十二日 皇学館大学神道博物館）

洪範再論 野村茂夫

第二八六回（九月十七日 茨木市市民会館）

『史通』と『資治通鑑』 福島正

第二八七回（十一月二十六日 関西学院大学池内記念館）

内藤湖南所蔵甲骨金文関係文献（内藤戊申旧蔵）を
めぐって

・関西学院大学図書館購入の経緯 木村秀海

・湖南と金文学 馬越靖史

・湖南と甲骨学 末次信行

第二八八回（十二月十日 KKR京都くに荘）

「父子有親」について 鈴木喜一

【平成七年（一九九五）】

第二八九回（二月二十八日 茨木市市民会館）

東涯「卦變考」について 花崎隆一郎

第二九〇回（三月二十五日 茨木市市民会館）

陳炳琨と『新時代』（一九三三年）について

―中国のプレヒト― 浜田直也

第二九一回（四月二十二日 長岡京市中央公民館）

郭象の思想について 武田秀夫

第二九二回（五月二十七日 茨木市市民会館）

私の中哲研究の回顧と現在 庄司荘一

第二九三回（六月十七日 関西大学百周年記念会館）

図入り類書『図書編』の成立について

矢野野隆男

第二九四回（七月二十九日 長岡京市中央公民館）

黄帝内経に於ける「狂」について 佐藤実

第二九五回（八月二十六日 吹田市市民会館）

老子化胡説の展開 前田繁樹

第二九六回（九月九日 茨木市福祉文化会館）

晩唐の隱逸思想―無名氏作『无能子』を中心に―

山口澄子

第二九七回（十一月十八日 大谷大学博綜館）

論語「民可使由之、不可使知之」章解釈をめぐって

若槻俊秀

第二九八回（十二月九日 茨木市市民会館）

游侠について 神楽岡昌俊

【平成八年（一九九六）】

第二九九回（一月二十七日） 茨木市市民会館

胡適の「不朽」について 大森良

第三〇〇回記念例会（三月二十三日） 城崎・ときわ別館

通書玉匣記初探 三浦國雄

第三〇一回（四月十三日） 茨木市福祉文化会館

台南孔子廟をめぐる一考察——台湾における儒教のあり方

についての一考察—— 小林和彦

第三〇二回（五月二十五日） 京大会館

貞観年間の礼の修定と『礼記正義』 島一

第三〇三回（六月十五日） 関西大学百周年記念会館

「彭」と楚文化の関系について

——馬王堆帛書『周易』を中心に—— 劉正

唐代判文の淵源 大野仁（中国古代理史研究会）

※当月は中国古代理史研究会と合同にて開催

第三〇四回（七月二十七日） 京大会館

戦国諸侯の称王と墨家の聖王思想 吉永慎二郎

第三〇五回（八月三十一日） 茨木市福祉文化会館

中国沿海地域の媽祖信仰 奈良行博

第三〇六回（九月二十八日） 茨木市市民会館

アメリカの中国学瞥見 吾妻重二

第三〇七回（十一月十六日） 高槻市立文化会館

朱子の「齊家」について 緒方賢一

第三〇八回（十二月七日） ルビノ京都堀川

魏了翁について 本田濟

【平成九年（一九九七）】

第三〇九回（一月二十五日） 茨木市市民会館

王安石の足跡を訪ねて——私の中国留学報告——

井澤耕一

第三一〇回（三月二十二日） 茨木市市民会館

上代「道」概念の拡大 宇野茂彦

第三一一回（四月十九日） 茨木市市民会館

性論よりみた荀子から董仲舒への天人観の移行

末永高康

第三一二回（五月二十四日） 茨木市福祉文化会館

古木墓祭 末次信行

第三一三回（六月二十八日） 茨木市市民総合センター

儒教の性格試論——漢代以前—— 齋木哲郎

第三一四回（八月二十三日） 茨木市市民会館

竹簡『文字』について 向井哲夫

第三一五回（九月二十日）高槻現代劇場集會室

瘧鬼について 大形徹

第三一六回（九月二十日）高槻現代劇場

顔回像について 衣笠勝美

第三一七回（十一月二十二日）京大会館

南朝陵墓と風水思想 南澤良彦

第三一八回（十二月六日）京都・鴨沂荘

氣の感応と修煉―同類相感を中心に― 坂出祥仲

【平成十年（一九九八）】

第三一九回（一月二十四日）茨木市市民會館

緯書の経解釈と科学知識 武田時昌

第三二〇回（三月二十八日）茨木市市民會館

陳仲子の思想傾向について 横久保義洋

第三二一回（四月二十五日）茨木市福祉文化會館

「天地之性、人為貴」をめぐる

―とくに漢代を中心に― 宇佐美一博

第三二二回（五月三十日）茨木市福祉文化會館

徐福渡来説雜考―主として日・朝の資料により―

柴田清繼

第三二三回（六月二十七日）茨木市福祉文化會館

礼記月令篇における氣について 久保田剛

第三二四回

（七月二十五日）大阪市立大学文化交流センター

劉玉の浄明道の教理哲学にみえる儒道融合思想につ

いて―『浄明忠孝全書』を中心に― 畑忍

第三二五回（八月二十九日）茨木市市民會館

景教経典『一神論』について 浜田直也

第三二六回（九月十九日）大阪市立大学医学部あべの

メディックス医療研修センター）

中国人民大学留学帰朝報告 佐藤実

第三二七回（十一月二十一日）茨木市福祉文化會館

荀爽の生き方と主張 田中麻紗巳

第三二八回（十二月五日）茨木市福祉文化會館

春秋何始於魯隱公 安本博

【平成十一年（一九九九）】

第三二九回（一月二十三日）茨木市市民會館

歐陽脩の『詩本義』をめぐる 塩出雅

第三三〇回（三月二十七日）茨木市市民會館

清末における改革論の展開

—「変法」の語を導きにして— 川尻文彦

第三三一回（四月二十四日 茨木市市民会館）

法家の法内容—賞罰の起源を考える— 菅本大二

第三三二回（五月二十二日 茨木市市民会館）

翁葆光の内丹について 秋岡秀行

第三三三回（六月十九日 茨木市福祉文化会館）

道教体内神統譜と大極図 加藤千恵

第三三四回（七月三十一日 大阪市立大学医学部あべ

のメディックス医療研修センター）

テクスト理解の準拠枠 山口久和

第三三五回（八月二十九日 茨木市福祉文化会館）

霞谷鄭斎斗緒論—朝鮮儒林における陽明学の受容—

中純夫

第三三六回（九月二十五日 茨木市福祉文化会館）

京儒 海保青陵と中国思想

—とくに洪範と老子をめぐって— 小林武

第三三七回（十一月二十日 茨木市市民会館）

朱熹遠隔講義の様態

—呂祖謙との交渉をめぐって— 市来津由彦

第三三八回（十二月十一日 茨木市福祉文化会館）

古棣・周英『老子通』を読んで 武田秀夫

【平成十二年（二〇〇〇）】

第三三九回（一月二十八日 茨木市福祉文化会館）

復卦の思想—程伊川を中心に— 白井順

第三四〇回（三月二十五日 平安会館）

私の研究生活 金谷治

第一部…『論語』子張篇について

第二部…回顧

第三四一回（四月二十二日 茨木市市民会館）

卜辞と『春秋』をめぐって 末次信行

第三四二回（五月二十七日 茨木市市民会館）

明堂について—先秦から唐代まで— 南澤良彦

第三四三回（六月二十四日 茨木市市民会館）

唐代儒学の周辺 岸田知子

第三四四回

（七月二十九日 大阪市立大学文化交流センター）

裴松之の方法 福島正

第三四五回（八月二十三日 茨木市福祉文化会館）

唐甄の生活と思想 塘耕次

第三四六回（九月二十三日 茨木市市民会館）

賈誼『新書』成立説に関する史料批判的研究

城山陽宣

第三四七回（十一月二十五日 茨木市市民会館）

古代中国の予言と災異思想―彗星と流星を中心に―

串田久治

第三四八回（十二月九日 茨木市市民会館）

『国語』章昭注について 池田秀三

【平成十三年（二〇〇一）】

第三四九回（二月三日 大阪市立大学文化センター）

仏教はいかにして受容されたか 多田伊織

第三五〇回記念例会

（二月三十一日 武田尾温泉・紅葉館）

『景德伝燈録』とその訳業

平木康平 アンナ・ルツジエリ

第三五一回（四月二十一日 茨木市市民会館）

『欽定四庫全書総目』における華夷観―外国書提要

を中心に― 王標

第三五二回（九月十五日 茨木市市民会館）

神仙詩の変遷 金秀雄

第三五三回（十二月八日 平安会館）

真父母考 麥谷邦夫

【平成十四年（二〇〇二）】

第三五四回（一月二十六日 茨木市市民会館）

帛書「十六経」中の黄帝臣について 村田進

第三五五回（六月二日 茨木市市民会館）

雑家類小考 宇佐美文理

第三五六回（八月二十四日 茨木市市民会館）

塗炭斎考 山田明廣

第三五七回（十二月十四日 ルビノ京都堀川）

『五行篇』の成立事情―郭店写本と馬王堆写本の比

較― 浅野裕一

【平成十五年（二〇〇三）】

第三五八回（三月二十九日 茨木市市民会館）

宋代の風水書『塋原総録』『地理新書』

宮崎順子

第三五九回（七月五日 茨木市福祉文化会館）

帛書『刑徳』雑考 末永高康

第三六〇回（九月十三日 茨木市市民会館）

王安石学派の興隆と衰退 井澤耕一

第三六一回（十二月十三日 ルビノ京都堀川）

私は「氣」の思想とどうかかわってきたか

坂出祥伸

(文責) 阪神中哲談話会 現幹事

菅本大二 (梅花女子大学)

矢野野隆男 (四天王寺国際仏教大学)

(諸連絡を受け付けております。幹事までご連絡下さい。)

【平成十六年(二〇〇四)】

第三六二回(四月二十四日 茨木市市民会館)

「情」の語義と思想上の地位

—先秦諸文献における用例の検討— 橋本昭典

以上、ここに示した記録は現状で報告できる限りのものである。前述したように、もし、さらに詳しい例会の記録の所在が明らかになれば、それは本報告がはたす最も大きな役割となるだろう。情報を幹事までお知らせいただければ幸甚である。

なお、当会の活動は、本記録でも明らかのように、平成十三年より、それまで長く続いていた年十回の例会活動から、年四回の例会活動に移行している。発表者確保の難しさが第一の理由であるが、第二の理由は、例会への参加者の激減である。最も参加者が少ない例会の時点では、幹事と発表者のみという場合もあった。本報告が、例会への参加者増につながれば、幹事としてこれほど幸せなことはない。